

# 本当に憎いのは 戦争そのもの



近藤 紘子<sup>こうこ</sup>さん

1944年広島生まれ。生後8カ月で被爆。父は広島流川教会の牧師で原爆乙女や戦争孤児の精神養子縁組に尽力した牧師の谷本清氏。アメリカの大学を卒業。国内外で講演活動を行う。立命館大学客員教授。著書に『ヒロシマ、60年の記憶』（徳間書店）がある。

## 原爆さえ落ちなければ

——ご自身の戦争体験を教えてください。

生後8カ月、爆心地1.1kmの牧師館で被爆。8月6日の朝、教会の牧師をしていた父が己斐山に荷物を運びに行っている間、原子爆弾が落ち、母と私は牧師館の下敷きになりました。母は赤ん坊だった私の泣き声で意識が戻ったけれど、誰も助けに来てくれない。火の手が上がってきたから、小さな隙間をつかってそこからなんとか逃げた。幸運にも父と母はお互いの安否が確認できましたが、父は人助けに奔走しました。

——幼少期にはどんな記憶がありますか？

2、3歳くらいのころから、廃墟となった教会にさまざまな思いを持った人が来ていたの。そのなかに若いお姉さんたちがいて、いつも「紘子ちゃん、紘子ちゃん」と可愛がってくれました。私の髪の毛を櫛でといてくれたりして。ただ、私はそのお姉さんたちのどこを見たらいいか、わからなかったの。優しく私の髪をといてくれる櫛を持つ手は、4本つながって、まぶたは額にくっついたまま、唇は顎にくっついている。のちに「原爆乙女」と言われるケロイドのやけどの被害を受けたお姉さんたちでした。どうしてこんな顔になってしまったのだろうか、とお姉さんたちが話しているのを聞いたりして、だんだんと事情がわかってきてね。

また、戦争で親を亡くした子どもたちの精神養子縁組を行うことになったため、そういう子どもが教会に来ていました。私は小さくて戦争の意味も分かっていないから、「この子たちをこんなひどい目に遭わせたのは、あの原爆だ。原爆さえ落ちなければ、こんな目に遭わなかった。原爆を落としたB29に乗っていた人たちが悪い。大きくなったら、私がかたきを打ってやる!」と思っていました。

ただ牧師の家だから、言うところ「こっちはいらっしゃい」と言われて、聖書の一文を見せられ延々と説教をされると思ったから、親には黙っていました。父が初めてお姉さんたちに会ったとき、「ああ、すまない。町が焼けてなくなったのは戦争だから仕方がないが、しかし、彼女たちに対してはアメリカは謝らなければいけない」と言っていました。

## B29 操縦士との出会い

戦後、米国のジャーナリスト、ジョン・ハーシー氏が原爆投下直後の広島の様子を描きたいと父に会いにきましたが、結局会えなかった。そこで父は、ハーシー宛てに手紙を書いたのです。ハーシーのほかにも、被災者のための家屋建設支援を行ったシュモ博士たち、父の知り合いの牧師さんなど良くてくれる人がアメリカから来ていたので、私は「アメリカ人が悪い」と思ったことはありません。ただ、あの原爆を落としたB29の乗組員だけは別。「あの人たちは悪者だ!」とずっと思っていました。

(ジョン・ハーシーが書いた『ヒロシマ』(法政大学出版局)には6人の人物が登場。その一人に近藤さんの父・谷本清氏がおり、近藤さんも登場している。2015年、ジョン・ハーシーの孫、キャノン・ハーシーに会ったとき、この8枚の手紙のコピーをプレゼントしてくれた。「このメモがなかったら『ヒロシマ』は書けなかった」というその内容は、原爆投下後の広島の様状と人々がどうやって生き延びたのかが詳細に書かれています。

『ヒロシマ』は雑誌『ザ・ニュー Yorker』に発表され、発売と同時に30万部の売り上げを記録。アメリカ人に深い関心を持って読まれました。1999年に発表された「20世紀アメリカジャーナリズム」のトップ100の第1位に選出され、アメリカでは1960年代から小学校の社会科の副読本になっています。この本も、近藤紘子さんの原点になっているそうです。

終戦後1年たったころから、父は戦争で被害を受けた人々への支援活動を始めます。

1955年、原爆乙女の治療のため、発案者の父とお医者さん、看護師さんが通訳の方と総勢25人のお姉さんとともにニューヨークのマウントサンナイ病院を訪れるためアメリカへ旅立ちます。父はアメリカの「This is Your Life (これがあなたの人生だ)」という番組に出演。そこにサプライズゲストとして私たち家族が登場するという内容でした。忘れもしない5月11

日、大きなホール。番組には、3人のアメリカ人がゲスト出演していました。そのなかにひとり、見慣れない男の人がいました。「あの人は誰？」と母に聞いたところ、母は一瞬悩んだ顔をした後に、「あの人はB29 エノラ・ゲイに乗っていたパイロットの副操縦士よ」と言いました。ずっとお姉さんたちのかたきを打ってやろうと思っていた本人が目の前にいるなんて、すごいショックでした。

## 戦争は誰をも苦しめる

でも今、舞台の真ん中に行き彼を叩いたりできないと子ども心にわかってきたから、精一杯目を見開いて彼を睨みつけていました。英語なので詳しいことはわからないけれど、番組のなかで司会者に「あなたは原爆を落としたとき、どう思いましたか？」と聞かれた副操縦士のキャプテン・ルイスは「ヒロシマが消えている。My God! What have we done? (おお神よ、私はなんということをしたのか)」と、母親にメモを残す形で飛行日記に記したと語りました。その直後、彼の目から涙が出てきた。

そのとき私は「今までこの人を憎んでいた自分はなんだったのか。鬼だと思っていたこの人、鬼じゃない。ごめんなさい。何も知らないのに、敵だ敵だと思っていた。申し訳ない」と私の目からも涙が出てきた。

番組の最後に、私たち子ども4人が登場して父と母の下へ歩み寄り、家族が再会したところで番組は終了。私はキャプテン・ルイスに近寄り、背中で手を組んでいた彼の手に触れた。それが精一杯の「ごめんなさい」でした。そしたら彼も握り返してくれた。その手が温かかったことを覚えています。

それが私の原点。この人に会わなかったら、いつまでも「自分は正しい」と正義を振りかざしていたと思う。この話は40年間行っている講演で話しています。その後アメリカの大学に通っていたころ、私を変えてくれた彼に一言「ありがとう」とお礼が言いたいと消息を調べてもらったら、精神病院に入院しているとのことでした。彼も後悔と懺悔の念に苦しめられていたのです。彼が作った彫刻はきのこ雲に涙一滴。戦争は誰をも苦しめる。戦争こそ心の悪。憎むべきは戦争だと。その後、日本に帰国して、何年か後に新聞で彼の死を知りました。

## 草の根の活動が世の中を変える

—— 2016年5月27日、オバマ大統領の広島訪問。スピーチの一節「原爆を投下した爆撃機のパイロットを許した女性があります。なぜなら、彼女は本当に憎いのは戦争そのものだとわかっていたからです」の箇所、近藤さんは「胸

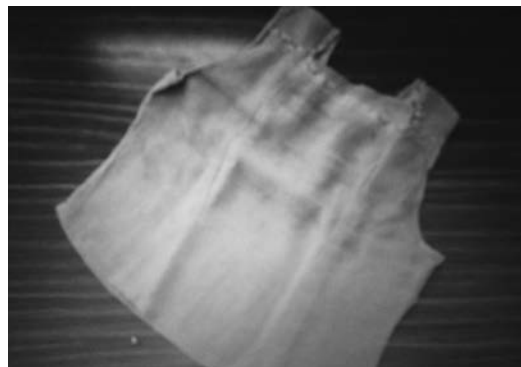
がいっぱいになった」といいます。

あれが私のことかどうかはわからない。ただ、もし私のことだとするならば、もう何十年講演で繰り返し話していたことを、誰かが伝えていった、「person to person」だということです。大切なことが人から人へと伝わって、あのスピーチの一文に反映されたのだと思う。あの箇所に「えっ」と思った。周りの人達から「絺子さんのことじゃない!?!」「絺子さんだよ!」と声を掛けられ、スピーチのあとには、携帯電話がたくさん鳴りました。父もよく言っていた。「国を動かそうとしてもそれはなかなかできない。けれども人から人へ話していく草の根の活動、それが世の中を変える」と。

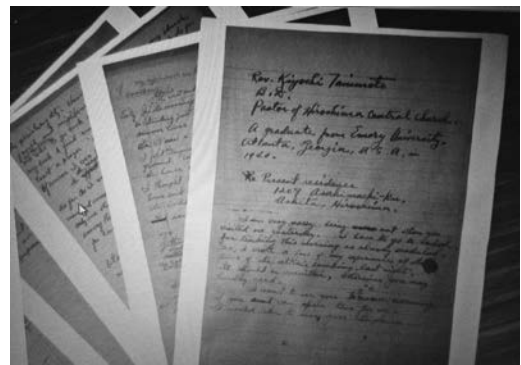
—— 若い世代へのメッセージをお願いします。

もう私も72歳。若い人に託すよりほかないの。1996年から学生さんたちを広島に連れていく活動を続けていて、現地で「この目でしかと見ておいで」と話しています。原爆慰霊碑には「安らかにお眠り下さい。過ちは繰り返させぬから」とあります。私はこの言葉を自分に言い聞かせています。生きている間にもう二度と戦争は起こさせぬからと。小学校で体験談を話すと、感想文に「めもごとがあったときまず考える。それが戦争の始まりだから」とあって、私がかつてほしいことが伝わってる。

「まかせたよ!伝えていってね!」と、声をあげて次の時代の子どもたちへ託します。(聞き手・前田 真子)



被爆をしたときに着ていたうすいピンク色の服。お母様が大事に持たれていたという。



谷本氏がジョン・ハーシーに宛てて書いた手紙のコピー。ハーシーが晩年教授を勤めていたイェール大学に保管。ところどころ書き直している箇所があり、この手紙を基に「ヒロシマ」は書かれた。